

理学部は今

No.34 June 2013



4月12日 自然環境科学科新入生歓迎会
(生協第1学生食堂にて)

CONTENTS

■新任教職員あいさつ

- ・小島秀雄 教授(数学科)……………2
- ・三浦 毅 教授(数学科)……………2
- ・星 明考 准教授(数学科)……………2
- ・金 鋼 准教授(物理学科)……………3
- ・広瀬雄介 助教(物理学科)……………3
- ・宮下孝洋 教授(自然科学研究科)…3
- ・侯野善博 教授(化学科)……………4
- ・三浦智明 助教(化学科)……………4
- ・大江一弘 助教(化学科)……………4

- ・小西博巳 教授(地質科学科)……………5
- ・則末和宏 准教授(自然環境科学科)…5

- 職員異動……………5
- 各学科ニュース……………6
- 理学部後援会の事業報告と事業計画……8
- 平成24年度卒業生進路状況および
平成25年度入学者数……………8
- 平成25年度理学部コロキウムの開催予定…8
- これからの行事予定……………8

理学部のホームページ <http://www.sc.niigata-u.ac.jp>
発行/新潟大学理学部広報委員会・理学部後援会

新任教員あいさつ



数学科 教授
小島 秀雄

この4月より本学工学部より理学部に配置換となりました。私は本学理学部出身で、2002年4月に本学工学部に着任しました。本学理学部は私の母校になります。数学科の教員はここ数年で大幅に入れ代わり、私が実際に講義を受けたことがある先生方は少なくなっていました。学部生時代の指導教員は吉原先生でして、これまでも、吉原先生と共同で大学院生の指導や研究活動を行ってきました。

学内での異動ですので困ることは殆どありませんが、教育面では、工学部の低学年次学生への基礎数学の講義中心から数学科の学生への専門の講義が中心と担当科目が大幅に変わり、講義の準備に時間がかかっています。教育学部や工学部で学生を指導してきたことや、工学部での卒業研究や修士論文の指導をしてきた経験を元にしながら、学生が理解しにくいところをできるだけ丁寧に解説するように努力しています。

私の専門は代数幾何学です。代数幾何学とは連立代数方程式の解として表される図形（これを代数多様体（だいすうたようたい）と呼びます）の様々な性質を解明することを目標にしています。代数多様体にも次元が定義できますが、私がこれまで主に研究してきたのは、2次元（代数曲面）の場合が中心です。3次元以上の代数多様体の構造を調べるのはとても難しく、2次元以下の場合と比べると分かっていることは極めて少ないのですが、分類を行うための一般論はできつつあります。私も低次元の場合だけでなく、これまでの研究で得た結果も用いながら、次元の高い場合も調べていくつもりです。

今後も本学に貢献できるよう、研究と学生への教育に、微力ではありますが頑張っていきたいと思えます。どうか宜しくお願い申し上げます。



数学科 教授
三浦 毅

4月1日付けで新潟大学理学部数学科に着任致しました三浦毅です。新潟大学には大学院博士後期課程の院生としてお世話になりましたので、新しい職場という感覚が乏しく、母校に戻った懐かしさと共に、教わる側から指導する立場に周った不思議な感覚の中で過しています。これまで12年間は新潟県に隣接する山形県に住み、山形大学工学部で教育研究を行ってきました。

私の専門は数学の中でも「関数解析学」と呼ばれる分野であり、中でも特に関数環や可換バナッハ環の理論に興味をもっています。数学の研究対象は概念として述べることは出来ても、実際に目に見える形で提示することが難しいのですが、厳密性を犠牲にし誤解を恐れずに述べれば、可換バナッハ環とは「ある種」の関数の集合です。どのような種類

の関数を考えるかで多様なバナッハ環が対象となります。例えば連続関数であったり微分可能な関数であったり、連続とは限らないが積分が考えられる関数などが考えられます。関数環は可換バナッハ環の特別な場合ということが出来ます。バナッハ環は抽象的な対象であるため、何の役にも立たないと言われることもあります。それでもバナッハ環に限らず数学を学ぶことには何らかの意味があると信じ、講義でもその思いを伝えたいと考えています。未熟な教育研究者ではありますがよろしくお願ひします。



数学科 准教授
星 明考

この4月に理学部数学科に赴任しました星明考（ほしあきなり）です。よろしくお願ひします。高校までは生まれ育った横浜で過ごし、大学以降は主に東京で過ごしました。途中約1年間、ふとしたきっかけからドイツの大学で研究する機会に恵まれ、ドイツの南東、ミュンヘンやニュルンベルクにほど近いレーゲンスブルクで生活をしました。レーゲンスブルクはとても美しい街で、町の中心の旧市街地にある大聖堂と近くを流れるドナウ川、またドナウ川にかかるドイツ最古ともいわれる石橋がとても印象的でした。現在ではこの旧市街地の一部は世界遺産に登録され、ケプラーが最期に亡くなった地としても知られています。これまで雪とはあまり縁のなかった私も、このときばかりは寒いドイツの冬を経験し、毎日気温が氷点下、さらには早朝にはマイナス10度ということも珍しくないような生活を体験しました。ところが、私にとってはドイツの雪

の中、多くの研究がうまく進み、今ではとても良い思い出となっています。新潟に来る事ができた今、また雪の中で、うまく研究が進むのではないかと期待しています。

私の専門は代数学・数論です。ピエール・ド・フェルマー（1607-1665）が「真に驚嘆すべき証明を発見したが、この余白はそれを書くには狭すぎる」と書き残したというフェルマーの最終定理は有名ですが、300年以上の時を経て1994年にアンドリュー・ワイルズによって、現代数学の最先端の理論（岩澤理論、ガロア表現、楕円曲線、保型形式の理論など）を駆使してフェルマーの最終定理が証明された以降も、信じられないスピードで世界中で研究が進み、次々と多くの発見がなされています。私も微力ではありますが、少しでも貢献していきたいと思っています。そしてこの新潟の地で、研究・教育・人材育成に邁進していきたいと思えます。



物理学科 准教授
金 鋼

4月1日に物理学科に着任しました金と申します。私は東京下町に生まれ育ち、大学からポスドクまで京都で過ごしました。その後愛知県岡崎市にある分子科学研究所で7年間助教として勤務し、新潟にやって参りました。

実は私の母の故郷が長岡でして、幼少の頃は夏休みにになると特急ときに乗って新潟へ遊びに来ていたこともあり、今回このようなめぐりあわせがあり新潟大学にお世話になることとなり大変嬉しく思っております。

専門は、統計物理学で複雑流体・ソフトマターとよばれる物質群の、通常の液体や固体とは異なる奇妙な動的性質について興味を持ち、主にコンピュータシミュレーションを用いて研究しております。この研究分野は物理を基礎としておりますが、化学・

生物・地学または工学とも密接に関連する、いわゆる学際的な研究になります。少し見渡しただけでも理学部の先輩教員方がカバーしている分野は非常に幅広く、今後様々な交流を通して新奇な問題にアタックしたいと考えています。

微力ではありますが理学部の発展に貢献できるような研究教育活動に全力を注ぎたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



物理学科 助教
広瀬 雄介

昨年10月に理学部物理学科に着任した広瀬雄介です。よろしくお願いいたします。一年前まで学生だったせいか、センター試験の日には大学周りでたくさんの声援をいただきました。恐らく私がそのような雰囲気を感じていたのでしょうか。新潟大学の教員の一人としての自覚と責任を再認識し、身を引き締めていきたいと思っておりました。教育と研究において研鑽を積み、貫禄を得たいところです。

私の専門分野は固体物質の磁気的・電気的性質を担う電子の状態を研究する物性物理学です。これまで主に希土類元素や遷移金属元素を含んだ磁性体や超伝導体を対象とし、単結晶育成を行い、結晶構造解析を始め圧力・磁場中での電気抵抗・磁化などのバルクの性質からdHvA効果の実験によるミクロな電子状態の研究も行ってきました。希土類元素はf電子というユニークな電子を持っていて、物質の物理的な性質に大きく寄与しています。そのf電子は圧力や磁場に対して敏感に反応し、大気圧のもとで

磁性体であった物質が高圧下で超伝導を示すなど興味ある物性を示します。外場によっても新しい状態を作り出せるという意味で、物質開発の一つの方法と言えます。

現在、超伝導転移温度が高いものは酸化物なので、加工が困難です。また、薄膜なども盛んに研究されていますが、バルクとしての材料の研究開発も重要で、高い超伝導転移温度や大きな臨界磁場をもつ金属材料の新物質育成と外場パラメータの制御による探索や超伝導機構の解明を目指しています。物質探索は簡単ではありませんが、炉から取り出すときはいつもワクワクします。学生とともに面白い物質を見つけ、新潟から発信していきたいです。

ところで、学生時代を過ごした関西では神戸のことを「しんだい（神大）」と呼びます。新潟も「しんだい（新大）」だそうです。赴任当初は学生と私の間で認識のズレがありましたが、段々と同音異義語として馴染んできました。



自然科学研究科
教育高度化センター
教授
宮下 孝洋

はじめまして、教育高度化センター実践型教育研究部門に任期付（3年）で採用となりました。私に与えられたミッションは広く理学部系大学院生に対して、『学生のキャリアパスを明確にする教育』や『グローバル化に対応した教育』を行うことです。具体的には、①インターンシップ受け入れ先企業の開発と斡旋・指導 ②キャリアパスを明確にするための実践型教育科目の講義 ③国際会議等の県内開催、参加する学生の引率 ④外部資金の獲得（大学院生と教授自ら）などです。何れも、私にとって容易な仕事ではありませんが、諸先生方と随時ご相談しながら進めたいと考えております。この場をお借りしてご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

私、出身は九州熊本ですが、雪深い妙高高原に約30年居住しております。民間企業で電池材料の研究開発～事業化を20年、新潟県の研究所および（財）にいがた産業創造機構（通称：NICO）で合わせて11年、産学官連携に関する仕事に取組んでき

ました。新任とはいえ、華麗ではなく加齢による転身で馬齢を重ね、しかも理学部勤務は初めてであり、メロン畑にかぼちゃが迷い込んだ感があります。ご迷惑をお掛けすることも多々あるかと思いますが、ご指導を宜しくお願い致します。

着任当日、辞令は頂いたものの落ち着き先がなく、正直先行きに不安を感じましたが、先生方のお計らいにより地鉦階奥之院の居室（A1-429）にご案内頂きました。お陰様で、元山岳部の私にとって、多種多様な岩（破片試料）に囲まれた大変幸せな日々を過ごしております。また、4月早々の学生や先生方の引越しも重なって、ガレ場の様相を呈していた廊下が日々綺麗になる様も、さすがにご指導の行き届いた新大理学部と感心した次第です。

非力且つ賞味期限付ですが、培った県内外の企業等ネットワークをフルに生かして、理学部発展の為に尽力したいと思っております。



化学科 教授
俣野 善博

本年4月1日付けで化学科に着任しました俣野善博です。よろしくお願いたします。中学・高校と大阪で過ごし、前任地の京都大学では学生時代を含め30年間を過ごしましたので、すっかり関西人になりましたが、生まれは東京、育ちは九州です。このたび初めて新潟で生活することになりましたが、弥彦山や日本海などの美しい風景から毎日エネルギーをもらっています。

私の専門は有機化学です。有機化学の最大の魅力は、新しい分子群を自らの手で創り出すことができる点です。私自身は、典型元素や遷移金属を含む π 共役分子に興味を持ち、その合成、物性評価、機能性材料への応用をボトムアップ型のアプローチで研究してきました。ご存じのとおり、それぞれの元素には個性があり、元素の組み合わせは多岐に渡りま

す。新潟でも、『元素化学と有機化学の融合』を主題に据え、元素の特性が相乗的に発揮されるような機能性材料や医療材料の創成をめざして、学生達と一緒に研究を展開していくつもりです。

私はこれまで理学研究科と工学研究科に在籍し、それぞれの風土に触れてきました。純粋な基礎化学と目的指向型の応用化学、いずれを欠いても大学教育は成り立ちませんが、学部を問わず、有機化学は両者を結びつけるための駆動力となり潤滑油となる学問であると考えています。本学においても、与えられた課題に対して学生自身が主体的に取り組むことができる環境と雰囲気を作り出したうえで、『高い志を持ち、夢と希望を生き生きと人に語ることができる、気骨あふれる学生』を育て、社会に送り出していきたいと思っています。



化学科 助教
三浦 智明

平成25年1月に化学科に着任しました三浦智明です。よろしくお願いたします。大学院修士課程まで茨城で過ごし、静岡、アメリカシカゴ、横浜と転々と移動して新潟にやってきました。

新潟大では、同じ物理化学分野の生駒忠昭教授と共同して研究を行っています。専門分野はスピニ化学という、化学の中ではかなりマイナーな分野です。スピニ化学を一言で説明すると、化学反応と磁場の関係に着目した物理化学ということになります。化学反応に対する磁場の影響はとても小さいと思われと思います。これは化学反応を担っている電子と磁場との相互作用がとても小さく、すぐに熱平衡に達してしまうことで説明できます。しかし、ラジカルのような「スピニ」を持った分子同士が熱平衡に達する前に反応した場合、大きな磁場効果が

生じることが1970年代から知られています。近年では渡り鳥の地磁気感知といった生物学的な観点からも注目を集めています。

私はこのような効果を化学反応のメカニズムを探るための道具として用いるというスタンスで研究を行っています。複雑な有機分子集合体の光反応メカニズムをスピニ化学の目を通して観測し、光のエネルギーを有効活用するためのアイデアを得ることが研究の目的です。

研究室での研究活動や学部での授業を通して、物理化学の面白さ、重要性を学生の方たちに伝えようと共に、私自身も成長していきたいと思っています。



化学科 助教
大江 一弘

今年の2月から自然科学研究科（化学科）の助教として赴任してまいりました、大江一弘と申します。大阪大学にて博士号を取得した後、茨城県東海村にある日本原子力研究開発機構に博士研究員として2年弱勤め、この度こちらでお世話になることになりました。

私の生まれは和歌山県でして、大学卒業まで大阪で暮らしていたことから、基本的に暖かい地方で生活してきました。そのため、こちらに赴任した直後は、新潟の雪の多さに驚きを隠せませんでした。しかしながらこちらの方々からは今年はあまり雪が降らなかったという話を聞き、次の冬は果たして大丈夫だろうかと今から心配しているところであります。

私は大学で研究室に配属された時から放射能を使った化学研究を行ってきております。特に興味を持ってこれまで進めてきた研究対象が、非常に原子番号の大きい、元素の周期表の末端に位置する超重

元素と呼ばれる元素の化学的性質です。これらの元素はすべて天然に存在しないため、人工的に合成しつつその性質を調べる必要があるのですが、合成できる量が非常に少なく（一原子単位）、長くても数秒から一分程度で崩壊してしまう不安定さから、その化学的性質はほとんどわかっておりません。このような元素の性質を明らかにするため、地道な仕事ではありますが日々研究を進めております。

今回助教として赴任したことで初めて教育者の立場に立つことになりました。周囲の環境の変化に戸惑いもあり、先生としてうまくやっていけるか不安を感じてはおりますが、学生たちとの大学生活は楽しく、非常にやりがいのある仕事であると感じております。微力ではありますが、私の研究および教育を通じて、新潟大学の発展に貢献できればと思っています。それではこれからどうぞよろしくお願い致します。



地質科学科 教授
小西 博巳

3月1日付けで地質科学科教授（自然科学研究科主担当）として着任いたしました小西博巳です。本学の卒業生で、1982年から1994年春まで新潟大で学びました。日本大学で4年間助手として勤務した後、1999年春に渡米し、幾つかの大学でポストドク、リサーチサイエンティストとして研究を続けてきました。最後にいた大学は、ウィスコンシン大学マディソン校で、マディソンには6年と少しおりました。新潟には、ほぼ20年ぶりに戻ってきて、大学も大学周辺も大きく変わったと驚いていますが、同時に、ところどころに、昔と変わっていないと懐かしく感じる部分を見つけてほっとしたりもします。

専門は、鉱物学で、電子顕微鏡を使って鉱物の結晶構造、ナノスケールの鉱物や地質現象を観察して、そこから、問題を解決する糸口を見つけるという仕事をしています。大型機器を使いますが、観察

という科学で最も原始的で、基本的な手法を使っています。観察という科学の手法で大切なことは、注意深く、また、時には時間を掛けて粘って実験することです。注意深い観察が重要なことは、飯島澄夫氏によるカーボンナノチューブ、ダニエル・シェヒトマンによる準結晶の電子顕微鏡観察による発見を見ても明らかです。しかし、多くのアメリカの大学では、こういう姿勢で研究や教育をすることは実はとても難しいのです。なぜなら、装置の使用料が高いので、常に、コストパフォーマンスを考えなければならないからです。幸い、新潟大の地質科学科では、高額の使用料を取らないで大型装置を管理しているの、学生に、注意深く観察すること、粘ることを伝えることができるかもしれません。久しぶりの古巣で、新潟大の強みを生かした研究・教育を進めたいと気持ちを新たにしているところです。よろしくお願ひします。



自然環境科学科 准教授
則末 和宏

出身は大阪で、前任地は京都大学化学研究所です。新潟で生活するのは全く初めてです。雪国での生活経験は殆どなく、新潟の冬の大変さを周囲の人からも教えられ、少々不安に思っております。一方、着任前から、新潟の美味しいお酒を楽しみにしておりましたが、実際に新潟に来て飲んでみると、飲みやすく、美味しく、種類も豊富で楽しんでおります。これまでのビールメインのスタイルから日本酒メインに切り替わりつつあります。ふと気がつけば、空になった一升瓶が家の中に蓄積されてきており、引き取り先の探索が大きな課題となりつつあります。

専門分野は海洋化学と分析化学です。海洋化学は海洋における化学成分の分布・循環や、化学成分-生態系間の相互作用を明らかにし、また関連する物質循環過程の解明を目指す分野で、気候・気象や古環境推定とも関連する地球化学分野です。海洋観

測と分析化学手法の開発を軸として、微量元素や同位体に着目した研究を進めております。微量元素や同位体は海洋で起こる様々なプロセス・現象を鋭敏に反映した時空間変動を示すため、これらのプロセスや諸現象を調べてゆく上で有用なツールとなります。外洋水中濃度レベルが極めて低く検出が困難なため、その簡便な手法開発も研究対象です。

海洋をフィールドとして、研究室の学生・院生等と共に、苦楽を分かち、こだわり深く、多角的な視点から、オリジナリティに富んだ研究を目指してゆければと願っております。学部生対象の科目を通して、地球・海洋環境を観る分野およびその基盤となる基礎化学の教育に尽力できればと考えております。これらの中で、学内、地域、国際連携も図ってゆければと考えております。今後ともどうぞよろしくお願ひ致します。



職員異動

本年3月、4月に理学部事務室スタッフの人事異動がありました。

桑原良子総務係長は、自然科学系農学部事務室主任からの配置換えで、総務事務総括関係について担当します。渡部晋介学務係主任は長岡技術科学大学総務部財務課からの配置換えで、主に学生異動・教員免許・入学試験関係について担当します。金子明果学務係員は、3月15日採用で主に講義室管理、各種証明書、学研災関係について担当します。

3人とも、教職員の皆さんがより良き教育研究活動を行えるよう、また学生の皆さんが充実した学生生活を送れるよう努力しますので、ご指導ご協力の程よろしくお願ひします。



左から桑原係長、渡部主任、金子係員



各学科ニュース

数学科

新入生を迎えて新学期が始まり大学もにぎわいが戻ってきました。数学科では、例年新入生合宿研修を実施しているのですが、今年度は実施できず残念でした。その影響なく、新入生が順調に大学生活に慣れたり、友達を作ったりしてくれることを願います。また、今年度は、教員も4名が新しくなりました。これにより、現在の教員構成は、解析学5名、代数学2名、幾何学2名、統計学2名、情報数学3名になりました。解析学分野は広範なので、教員数も多くなっています。学生の希望する専門分野に可能な限り応えられるように教員をそろえています。

写真は、微積分学と線形代数の演習を行う数理基礎演習の授業風景です。微積と線代を1年から2年のI期までⅢ期に亘って学びます。これらの科目は、その後に習う数学の基礎になるので時間をかけてしっかりと学ぶようにカリキュラムが組まれています。計算などのテクニックだけでなく、微積と線代に登場する考え方は、その後に習う数学の中に手を替え品を替え登場します。その時に、アイデアのルーツや同質性を見破れ

るくらいに深く理解してくれることを期待しています。しかし、これは私の学生時代に鑑みると難しいです。学んだことやその思考経験が熟成されるには時間が掛かります。ちょっとやっすぐにできる内容ではないので、学生には不断の努力を期待しています。



物理学科

学科の名物教授であられた後藤輝孝先生がこの3月、定年でご退官されました。後藤先生は、超音波を使って極低温まで冷やした物質の性質を調べるという、日本国内のみならず世界的にも非常にユニークな方法で、多くの成果をあげられました。いつもにぎやかな後藤先生がいらっしゃらない学科会議は、こころなしか、さみしいものを感じられました。写真は後藤先生の最終講義と、引き続きおこなわれた懇親会の模様です。

後藤先生と入れ替わりに4月から、物性理論分野の新しい准教授として着任された金鋼先生が、ご活躍されています。金先生のお人柄についての私の第一印象は、『後藤先生の対極にある物静かな方』です。今月号に新任教員の自己紹介記事をご寄稿されていますので、ご覧ください。



後藤先生の最終講義



懇親会の模様

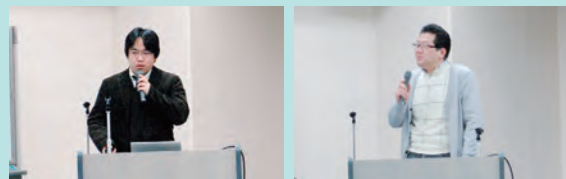
化学科

化学科では平成24年度末にて徳江郁雄教授と堀米恒好教授が定年を迎えられました。お二方も研究・教育に関して尽力され化学科の運営・教育では大変お世話になりました。

また、昨年度11月に機器分析センターに古川真准教授が新たに着任され化学科と連携して研究・教育を推進していただいています。さらに1月には物理化学分野の三浦智明助教、2月に核・放射化学分野の大江一弘助教、新年度4月には有機化学分野の俣野善博教授が新たに着任されました。このように化学科では構成員が大きく変わりました。

3月には卒論発表が分野ごとに行われ、4年生は1年間の研究成果を発表しました。また3月13日にはグリーンケミストリー連携教育研究センター第3回研究シンポジウムを開催しました。シンポジウムではセンター所属の教員による研究紹介、学部・大学院生による口頭発表、ポスター発表が行われ、活発な討論が行われました。

新年度4月には例年通り入学式後のガイダンス、新入生歓迎会、学生・教職員懇親会などの行事を行いました。



グリーンケミストリー連携教育研究センター第3回研究シンポジウム



卒論発表

生物学科

生物学科では、昨年度3月末日をもって学科事務員である池田恵美子さんが退職されました。池田さんは、長年にわたって生物学科に従事され、学生からは「生物学科の母」として非常に慕われていました(写真)。また、教員もみな池田さんをととても頼りにしていました。池田さん、本当にお疲れ様でした。なお、4月からは池田さんの後任として、葦澤香織さんが学科事務の仕事を担当してくださることになりました。着任早々、学科ガイダンスの仕事に追われ大変だったと思いますが、これからどうぞよろしくお願い致します。

本年度生物学科へは、21名の新1年生と2名の3年次編入生が入学しました。4月8、9日の新入生ガイダンスでは、高校とはまったく違ったカリキュラムに戸惑った様子も伺えましたが、真剣に説明を聞いて対応しようとしていました。4月26日の夕方には、毎年恒例の新入生と教員の懇談会が開催されました。新入生、在学生および教員が理学部大会議室に集まり、お弁当を堪能しながら、新入生の自己紹介や教員の「生物学(生物学者)との出会い」というお題のスピーチで盛り上がりました(写真)。なお、5月18、19日には、学科初の試みとして、佐渡臨海実験所において新入生研修会が行われる予定です。これらの会をきっかけに、新入生が早く生物学科に溶け込んでくれることを願っています。



学生から池田さんへの花束 & プレゼント贈呈



新入生と教員の懇談会



1年生の最初の野外実習での食事風景。新潟市内角田浜

地質科学科では、新1年生29名を迎え、今年も元気にスタートしています。地質学は資源・防災・インフラ整備等の面で生活の基礎を作るもので、社会の期待が大きな分野です。学生の皆様の志を大きく伸ばせるよう、教員一同、本年も努めていきます。保護者の皆様のご理解ご支援をよろしくお願い申し上げます。なお教授・赤井純治(鉱物学)が定年退職、准教授・志村俊昭(岩石学)が転出し、小西博巳を新たに教授(鉱物学)に迎えました。

地質科学科

自然環境科学科

自然環境科学科では昨年度末に卯田強先生が惜しまれつつ定年退職されました。一方、4月から則末和弘先生がスタッフとして加わり、新しい教員構成で新年度がスタートしました。学科のメンバーとして新たに31名の新入生を迎え入れました。今年は男女比がほぼ50:50で、1年生向けの講義を数回おこなった印象では、例年より華やかな気がします。また、皆さんまじめで勉強熱心であるという好印象も合わせて持っています。4月12日には恒例になっている新2年生が企画実施する新入生歓迎会が行われました。学科メンバーのほとんどが参加して盛り上がるこの会は、新入生が学科の雰囲気を知る良い機会になっており、会がお開きになる頃には笑顔で学科に馴染んでる新入生の姿が見られました。新入生の学生さんのみならず学生の皆さんには知的好奇心を枯らすことなく、広い「知

の空を自由に羽ばたいて、大いに大学を楽しんでもらいたいと願っています。



新入生歓迎会の様子



理学部後援会の事業報告と事業計画

理学部後援会理事会が3月29日(金)に開催され、平成24年度の各種事業の報告と、平成25年度の各種事業計画がいずれも承認されました。そして平成25年度の定期総会が

4月5日(金)に開催され、今年度の各種事業計画の説明がされ、承認されました。

平成24年度 理学部後援会事業報告

- 1 定期総会の開催**
平成24年4月5日(木) 11時から
新潟大学理学部B303講義室
- 2 各種事業**
 - (1) 学生の課外活動及び福利厚生関係
 - ① 新聞の購読(新潟日報、朝日新聞、日本経済新聞)
 - ② 大学祭援助
 - ③ 学生用設備充実の援助
 - (2) 学部教育事業関係
 - ① 特別講演会の開催、学生用図書購入、新入生合宿研修、野外実習及び臨海実習等の援助
 - ② 学生インターンシップ協力事業所との懇談会への援助
 - ③ 国際交流事業関係等への援助
 - (3) 卒業祝賀会関係
平成25年3月25日(月) 東映ホテルで開催
 - (4) その他
広報活動として「理学部は今」を年3回発行
- 3 理事会の開催**
平成25年3月29日(金) 17時30分から理学部小会議室

平成25年度 理学部後援会事業計画

- 1 定期総会の開催**
平成25年4月5日(金) 11時から
新潟大学理学部B303講義室
- 2 各種事業**
 - (1) 学生の課外活動及び福利厚生関係
 - ① 新聞の購読(新潟日報、朝日新聞、日本経済新聞)
 - ② 大学祭援助
 - ③ 学生用設備充実の援助
 - (2) 学部教育事業関係
 - ① 特別講演会開催への援助
 - ② 学生研修、実験・実習への援助
 - ③ 国際交流事業関係等への援助
 - ④ インターンシップ関係等への援助
 - (3) 卒業祝賀会関係
卒業式当日に卒業祝賀会を開催 平成26年3月24日(月)
(参加者: 卒業生、保護者、同窓会役員、後援会役員、教職員)
 - (4) その他
広報活動として「理学部は今」を年3回発行
- 3 理事会の開催**
平成26年3月28日(金) 17時30分から理学部小会議室(予定)



平成24年度卒業生進路状況および平成25年度入学者数

		数学科	物理学科	化学科	生物学科	地質科学科	自然環境科学科	計	
平成25年度 入学者数	新入学	39	48	38	21	29	31	206	
	3年次編入学	4	2	2	2			10	
平成24年度 卒業生進路状況	進学	12	32	27	13	6	13	103	
	教員(含む非常勤)	6	3	1		1		11	
	公務員	1	4	2		5	6	18	
	民間 企業	食品・飼料	1	1		2			4
		繊維・化学・石油	1		1				2
		電力・ガス		1			1	1	3
		製薬							0
		建設・建設材料					5		5
		金属・機械		1	1				2
		電気・精密機械	1						1
		情報・通信	4				2	1	7
		印刷・出版				1			1
		商業・サービス	2	4	5	1	3	5	20
	金融・保険	1					1	2	
	教育学習支援	3						3	
	運輸・その他	1	1				2	4	
	その他	6	2	2	2		1	13	
合計	39	49	39	19	23	30	199		

注) 平成25年4月26日現在の状況です。

*留学生を含む



平成25年度理学部コロキウムの開催予定

- | | | | | | |
|------|---------------|------|------|----------------|---------|
| 第61回 | 2013年5月22日(水) | 数学科 | 第64回 | 2013年10月23日(水) | 化学科 |
| 第62回 | 2013年6月26日(水) | 生物学科 | 第65回 | 2013年11月27日(水) | 地質科学科 |
| 第63回 | 2013年7月24日(水) | 物理学科 | 第66回 | 2014年1月9日(水) | 自然環境科学科 |

これからの 行事予定

- | | | | |
|-------------------|---------------|----------|----------|
| 8月8日(木)、9日(金) | 新潟大学オープンキャンパス | 9月20日(木) | 秋期卒業式 |
| 8月10日(土)~9月30日(日) | 夏期休業 | 10月1日(月) | 第2学期授業開始 |
| 9月3日(火) | 3年次編入試験 | | |

オープンキャンパスのイベント等の詳細は新潟大学および理学部のホームページに掲載されます。

お問い合わせ 窓口のご案内

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050
 新潟大学理学部学務係
 TEL : 025-262-6106
 FAX : 025-262-6354
 Mail : gakumu@ad.sc.niigata-u.ac.jp

リサイクル適性

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。